

自然と人間のはざままで考えること

東京都立大学名誉教授

堀 信行

1. はじめに

東日本大震災の10年を考えることは、人類がいかにして生きてきたかを問い直し、人間として生きるためには、何が大切かを考えることでもある。東日本大震災は、人間存在の根底を揺さぶる奥深い内容を伴っている。

東日本大震災は、マグニチュード9.0という日本の観測史上で最大規模の地震であった。震源域は岩手県沖から茨城県沖まで、南北500km、東西約200kmに及ぶ広さで、最大震度は6強から7に達した。そこへ津波。波高は10mを超え、最大遡上高度は40.1mに達する巨大なものだった。表土等を巻き上げながら、黒々とした津波が地表の生活空間を容赦なく飲み込んでいく光景は、今も脳裏から消えない。被害の甚大さは言うまでもない。行方不明の方を含め、亡くなった方は1万8千人を超える。痛ましいことに震災関連死の方が3千7百人を超える。さらに原子力発電所事故による放射能の汚染問題。この問題は、先の震災関連死にも関係して、問題の深刻さは今後も続く。

震災後10年経っても、筆者には未だに問題の本質と全貌が理解できていないと痛感するばかりである。

2. 東日本大震災を考える一つの視座

東日本大震災の全体像を考えるために、問題を大きく4つに分けてみた。第一は、大震災の起因である地震と津波。両者は地球自体の物理的な動きで生じた自然現象なので、①「地球のこと」とする。第二は、地震と津波によって人間の生活空間と社会を破壊し、絆を寸断し、命も奪った。これを②「場所と命と心のこと」とする。第三は、地震と津波によって生活空間を充填し、機能させていた様々なインフラストラクチャー（建物や電気・

ガス・水道等の諸施設、道路や港湾や防潮堤等）が破壊・寸断された。これを③「インフラのこと」とする。第四は、前者に原子力発電所事故が含まれるが、単なる事故では済まない、場所も命も奪う内容なので、④「原発事故のこと」とする。

3. 「風化」と諸事象の時・空間スケール

東日本大震災から10年、人々の中から震災が忘れ去られつつあるとして「風化」が話題となる。風化は地球科学の用語。社会的にも使われるが「忘却」とほぼ同義語である。

地球上の命は風化のお陰で生存できる。これは決して大袈裟ではない。例えば岩石は風化を経て土壤に繋がり、動植物が生存できる。風化とは消滅でなく、何かへと変質する過程であり、避けられない一過程であることを再認識し、次の命に繋いでいく工夫が肝要だ。すでにそうした試みが各地にあるのは未来への光だ。

前節の①～④のことを論ずれば長くなるが、とくに時間スケールからみれば①は地球の時間（ $10^1 \sim 10^4$ 年）として生起する現象。②の人間の時間（ $10^1 \sim 10^2$ 年）との重なりは弱い。③のインフラの時間は前者の②との重なりが強い。問題は④。放射能の時間スケールは 10^4 年に達する。今の人間が後世に責任を持てるだろうか。人間はこれを平和裏に地球の時間の中に、つまり地下深く押し込めようとするが不安は尽きない。一方でこれを人間が人類の死に繋がる方へ使おうとする力が働いている。我々は②の死によって人間の絆が絶たれた心の空洞は、時間では癒やされないことを十分知ったはずである。東日本大震災から10年。③のことについては、地域差を伴いながら目で見える変化が起きている。だが①と②と④については、「僅か10年」である。「人間とは一体何者なのか」を問い続けなければならない。